

もう何年前になるだろう？日本で「シャンソン」といわれる歌に興味を持って、フランス語でそれを解説するカルチャーのクラスに通ってみたのは。入って間もなくクラスの代表 K さんから「教室で配る会報にエッセイを書いてくれないか？」と言われて「歌もよく知らずフランス語も出来ないのに書いていいのかしら？」とフランス語の辞書を頼りに書きはじめた。教室は短期でやめてしまったのに、K さんが立ち上げたホームページには文章を書き続けた。彼が亡くなってから彼の意思の一部でも残せたらと始めたのが私のホームページである。そのつながりで（否たとえ何も書かなくても彼らの優しさで）今は講座には所属していないのに OB(OG)という名目で「飲み会だけでもどうぞ」と、毎月の定例会ばかりでなく毎年の忘年会にもお誘いいただく。

さて、その忘年会にて今年も素敵な出会いがあった。このグループは先生が「フランス語の意味を曲げずに伝えるシャンソンの普及」「フランスの歌はフランス語で」と提唱している。けれど頭の中は決してフランス一辺倒ではなく東洋の知識にもあふれている。いわば人間の幅が広い。そしてフランス文化の知識が深い。その中で、比較的マイナーなこのジャンルでフランスでも日本でも 300 人ほど集客する歌手の方と初めてお目にかかった。もともとこのグループはコーラスをやっていたり、地域役員をやっていたり、英語やフランス語の先生をやっていたり、利益ではなく歌の本質で勝負する歌手であったりと、先生同様フランス一辺倒に埋没しない豊かな人間たちの集まりだ。だから「楽しく飲食して遊んで終わり」という会にとどまらず、いろいろな生き方を学ぶことが多い。実に生き生きと自分の人生を切り開く人たちが集まるこの会は、私にとってとても楽しい。

そして思う。これらの人々は正に自分の道を見つめて歩いている。だから他人のことをとやかく言わない。「私は私の道を行く。あなたはあなたの道を究めなさい」フランク・シナトラの歌で有名な「マイ・ウエイ」のように自分に恥じる生き方はしないだろう。ぶれていないから「相手のために何かやってあげたい」と思っても、それは自分の感情の押し付けではなく、冷静に相手を尊重しながらの援助である。「私が行なえないこのチャンスをあなたに投げる。それを掴んで生かすのはあなた自身だ」また世間の状況によって態度を翻さない。夏目漱石の「信念を曲げず、行き着くところまで行って斃れるのだ」という一文を思い出す。

近年は景気の落ち込みで生活も大変になっている。老舗といえども生き残りをかけて世間の経済ニーズに迎合して質を落とすところが少なくない。けれど一度落ちた質は景気が回復しても取り戻せるものではない。信念を曲げると、一時的にはではなく延々と姿を変えていかざるを得ないだろう。転がった石は加速していき坂道を上ることはできない。その結果得られるものは何か？「昔はよかったけれど落ちぶれたまま消えたわねえ」と良い部分は忘れ去られ、悪い部分だけが人々の記憶に焼付くのである。いや、それどころかその存在さえも忘れ去られるだろう。だからといって名を残すために質を維持せよというのではない。「印象に残る」のは結果であって、残ろうが残るまいが自分の生き様を自分に記すのだ。質を落とさない中の再生こそ本物の信用なのだ。結果というものは自分が予想するものではない。自分の行いに付いてくるものだ。Ô! TOI LA VIE 散る覚悟のないものは美しく咲くことはできない。(2012.12.9)